谷川俊太郎の「その世」

内田　満夫

詩人・谷川俊太郎が亡くなった。タイトルに惹かれて、谷川俊太郎・ブレイディみかこ共著の対談『その世とこの世』（岩波書店、二〇二三年）を手にとったところだった。

とどまることができない　／その世のつかのまに／人はこの世を
忘れ／知らないあの世を……

詩人と作家の、韻文と散文が入りまじり交差する。散文ならなんとか解読できるが、詩人の発する言の葉のほとんどは韻律を感知できない自分を素通りする。そのなかで、谷川の発した「その世」だけはストンと胸に落ちた。

彼によれば、この世とあの世のあわい(間)にその世はある。誰もが知る「この世」と「あの世」は、どちらも国語辞書にしっかりと記載がある。「その世」は辞書にないがこれは、この世からあの世（来世）に渡る刹那に人がとどまる立つ瀬に違いないと、私は都合よく解釈することにした。

晩秋のある未明、大阪の高槻に住む甥から、母（私の妹）が亡くなったと連絡があった。四年前に胆管癌が見つかり闘病中だったのである。つい二週間前に検査入院すると本人から電話があって、いつもと変わらぬ声を聞いたばかりだった。

二人兄妹で育った。幼少期はお兄ちゃんお兄ちゃんと、いつも私のあとをついてきた。生活費を巡って諍いの絶えない両親のもとで一緒に堪えていたから、絆は強い。自分も随分妹を可愛がった。楽しいにつけ悲しいにつけ、想い出は尽きない。

癌の宣告があったということは、そろそろ旅立ちの心づもりをしなさいという天からの啓示だ。爾来、年に数度は訪ねていろんな話をして聞かせた。今にして思えばまるで、谷川の言う「その世」に身を置いて、来世の景色を楽しく描いてみせていたようだ。それはこの歳になって、人の意識・霊性の不滅に望みを託す心境に至った、今の自分自身に言い聞かせる物語でもあった。

ところが、二〇〇〇年の初めにコロナ禍が襲来して状況が一変する。妹が感染を過度に警戒しだしたのだ。親しい友人が訪ねてきても、なかに入れずに玄関で追い返す。私にも会おうとしなくなった。この世であと何度会えるというのか？　今のうちにできるだけ会っておかないと！　そんな話をするのだが全く通じない。

二週間前の電話が、生前の妹と会える最後のチャンスだったのだ。そのときも、「もうわかった。こんど会うのはお前の死に顔を見るときだ！」という怒りを飲み込んで電話を切ったのだが、そのとおりになってしまった。妹は最後の立つ瀬だった「その世」に一刻も身をおくことなく、来世に一足飛びした。詩人の、この一語を伝えるチャンスのなかったことが悔やまれる。